

評価結果報告書

地域密着型サービスの外部評価項目構成

	項目数
I. 理念に基づく運営	11
1. 理念の共有	2
2. 地域との支えあい	1
3. 理念を実践するための制度の理解と活用	3
4. 理念を実践するための体制	3
5. 人材の育成と支援	2
II. 安心と信頼に向けた関係づくりと支援	2
1. 相談から利用に至るまでの関係づくりとその対応	1
2. 新たな関係づくりとこれまでの関係継続への支援	1
III. その人らしい暮らしを続けるためのケアマネジメント	6
1. 一人ひとりの把握	1
2. 本人がより良く暮らし続けるための介護計画の作成と見直し	2
3. 多機能性を活かした柔軟な支援	1
4. 本人がより良く暮らし続けるための地域資源との協働	2
IV. その人らしい暮らしを続けるための日々の支援	11
1. その人らしい暮らしの支援	9
2. その人らしい暮らしを支える生活環境づくり	2
合計	30

事業所番号	3070103654
法人名	明日葉有限会社
事業所名	グループホーム明日葉
訪問調査日	平成21年 4月 24日
評価確定日	平成21年 6月 9日
評価機関名	特定非営利活動法人 認知症サポートわかやま

○項目番号について

外部評価は30項目です。

「外部」の列にある項目番号は、外部評価の通し番号です。

「自己」の列にある項目番号は、自己評価に該当する番号です。参考にしてください。

番号に網掛けのある項目は、地域密着型サービスを実施する上で重要と思われる重点項目です。この項目は、概要表の「重点項目の取り組み状況」欄に実施状況を集約して記載しています。

○記入方法

「取り組みの事実」

ヒアリングや観察などを通して確認できた事実を客観的に記入しています。

「取り組みを期待したい項目」

確認された事実から、今後、さらに工夫や改善に向けた取り組みを期待したい項目に○をつけています。

「取り組みを期待したい内容」

「取り組みを期待したい項目」で○をつけた項目について、具体的な改善課題や取り組みが期待される内容を記入しています。

○用語の説明

家族等 = 家族、家族に代わる本人をよく知る人、成年後見人などを含みます。

家 族 = 家族に限定しています。

運営者 = 事業所の経営・運営の実際の決定権を持つ、管理者より上位の役職者（経営者と同義）を指します。経営者が管理者をかねる場合は、その人を指します。

職員 = 管理者および常勤職員、非常勤職員、パート等事業所で実務につくすべての人を含みます。

チーム = 管理者・職員はもとより、家族等、かかりつけ医、包括支援センターの職員等、事業所以外のメンバーも含めて利用者を支えている関係者を含みます。

1. 評価結果概要表

【評価実施概要】

事業所番号	3070103654
法人名	明日葉有限会社
事業所名	グループホーム明日葉
所在地	和歌山市小瀬田80番地の2 (電 話) 073-49-3369

評価機関名	特定非営利活動法人 認知症サポートわかやま		
所在地	和歌山市四番丁52ハラダビル2F		
訪問調査日	平成21年4月24日	評価確定日	平成21年6月9日

【情報提供票より】(平成21年 3月 24日事業所記入)

(1) 組織概要

開設年月日	平成 16 年 3 月 20 日		
ユニット数	1 ユニット	利用定員数計	9 人
職員数	10 人	常勤 3 人, 非常勤 7 人, 常勤換算 3.0 人	

(2) 建物概要

建物構造	木造 造り
	1 階建ての 1 階 ～ 1 階部分

(3) 利用料金等(介護保険自己負担分を除く)

家賃(平均月額)	40,000 円	その他の経費(月額)	28,000 円
敷 金	有 (200,000円)		
保証金の有無 (入居一時金含む)	無	有りの場合 償却の有無	
食材料費	朝食 円	昼食 円	
	夕食 円	おやつ 円	
	または1日当たり	1,200 円	

(4) 利用者の概要(平成21年 3月 24日現在)

利用者人数	9 名	男性	2 名	女性	7 名
要介護1	0 名	要介護2	2 名		
要介護3	2 名	要介護4	4 名		
要介護5	0 名	要支援2	1 名		
年齢	平均 84 歳	最低 71 歳	最高 97 歳		

(5) 協力医療機関

協力医療機関名	上山外科 さくらクリニック 和田皮膚科 辻秀樹整形外科等
---------	------------------------------

【外部評価で確認されたこの事業所の特徴】

静かで自然豊かな環境に位置している。ホームの棟続きにデイサービスが併設されており、ウッドデッキの前の広場には池があり、ゆったりとした生活を送る環境が整っている。敷地内には、住宅改修を行っている母体会社事務所と経営者の自宅、託老所の宿泊施設が隣接していて、入居者が外へ出ても全体から目が行き届きやすくなっている。敷地内の広場には屏や囲いがなく、近くの子供たちが来て遊んでいることもあるなど、開放的な造りとなっている。

【重点項目への取り組み状況】

重点項目①	前回評価での主な改善課題とその後の取り組み、改善状況(関連項目:外部4) 前回外部評価調査より5年が経過しており、評価に関する意識は希薄であり、特に取り組みはされていない。 今回の自己評価に対する取り組み状況(関連項目:外部4) 施設長と管理者によって行われており、他の職員は殆どかかわっていない。
重点項目②	運営推進会議の主な討議内容及びそれを活かした取り組み(関連項目:外部4, 5, 6) メンバーは決まりつつあるが本人、家族、市の担当者や地域包括支援センター職員はメンバーに予定されておらず、まだ1度も開催されていない。
重点項目③	家族の意見、苦情、不安への対応方法・運営への反映(関連項目:外部7, 8) ケアプランについては月に一度家族と話し合い説明しており、その際や日常随時の電話連絡などで家族の意見や相談などを受け、対処している。
重点項目④	日常生活における地域との連携(関連項目:外部3) 近隣住民と挨拶を交わす事はあるものの、行事参加などへの積極的な参加はみられず、施設長の個人的人脈で地域と関わっている。

2. 評価結果(詳細)

(☐ 部分は重点項目です)

取り組みを期待したい項目

外部	自己	項 目	取り組みの事実 (実施している内容・実施していない内容)	(○印)	取り組みを期待したい内容 (すでに取り組んでいることも含む)
I. 理念に基づく運営					
1. 理念と共有					
1	1	○地域密着型サービスとしての理念 地域の中でその人らしく暮らし続けることを支えてい(サービスとして、事業所独自の理念をつくりあげている	開設当初より理念を掲げているが、その後見直し等は行われず、地域密着の意味合いも含まれていない。	○	地域密着型サービス本来の地域社会の中の「我が家の生活」の意味合いを組み込んだ理念を再構築し、地域に溶け込んだ生活支援の実現を期待する。
2	2	○理念の共有と日々の取り組み 管理者と職員は、理念を共有し、理念の実践に向けて日々取り組んでいる	ホームは開設当初からの理念を掲げ、日々のケア業務の指針としてケアに取り組んでいる。		
2. 地域との支えあい					
3	5	○地域とのつきあい 事業所は孤立することなく地域の一員として、自治会、老人会、行事等、地域活動に参加し、地元の人々と交流することに努めている	近隣住民との日常の挨拶などの関係作りはなされているが、自治会をはじめとする各種団体との関係は希薄である。	○	各地区の支所・連絡所との関係作りを積極的に進めて、地域活動に参加しながら交流を進めていくことが望まれる。
3. 理念を実践するための制度の理解と活用					
4	7	○評価の意義の理解と活用 運営者、管理者、職員は、自己評価及び外部評価を実施する意義を理解し、評価を活かして具体的な改善に取り組んでいる	前回の外部評価より5年の間外部評価を受けておらず、前回評価時の内容自体も職員に周知されていない。	○	日常ケアや法令に定められた義務等を含め地域密着型サービスそのものの理解を最初から洗い直し、何のために評価を受け、どう活用するのか、一から再検討されたい。
5	8	○運営推進会議を活かした取り組み 運営推進会議では、利用者やサービスの実際、評価への取り組み状況等について報告や話し合いを行い、そこでの意見をサービス向上に活かしている	現在はメンバーを決める段階にあり、会議そのものは未実施である。	○	メンバーには家族や本人、市や地域包括支援センター職員、地域の各種団体からの参加が望ましく、具体的な目標を設定し計画的に開催されたい。

外部	自己	項 目	取り組みの事実 (実施している内容・実施していない内容)	(○印)	取り組みを期待したい内容 (すでに取り組んでいることも含む)
6	9	○市町村との連携 事業所は、市町村担当者と運営推進会議以外にも行き来する機会をつくり、市町村とともにサービスの質の向上に取り組んでいる	施設長が自身が持つ人脈を活用し積極的に働き掛けている。		
4. 理念を実践するための体制					
7	14	○家族等への報告 事業所での利用者の暮らしぶりや健康状態、金銭管理、職員の異動等について、家族等に定期的及び個々にあわせた報告をしている	職員の異動や本人のホーム内の素顔・様子などを家族に伝えるための定期的な報告はされていないが、月に一度のケアプラン承認時や随時の電話連絡で報告を行っている。		
8	15	○運営に関する家族等意見の反映 家族等が意見、不満、苦情を管理者や職員ならびに外部者へ表せる機会を設け、それらを運営に反映させている	外部への意見の発信の機会は設けられていないが、月に一度のケアプラン承認時や日常随時の電話連絡などで家族の意見や相談などを受け、対処している。		
9	18	○職員の異動等による影響への配慮 運営者は、利用者が馴染みの管理者や職員による支援を受けられるように、異動や離職を必要最小限に抑える努力をし、代わる場合は、利用者へのダメージを防ぐ配慮をしている	入居者が不穏な状態に陥るのを避ける事を重視し、異動・離職の際には入居者・家族に知らせないようにしている。また職員個々人の不満等を相談するよう周知しているが、実際には相談は殆んどない。	○	入居者に何も知らせないことは、ダメージを抑える事に一時的に有効であっても、入居者と生活を共にし職員と心を通わすケアの趣旨に反することになる。ホームの運営を根本から見直し、職員を含めた一ユニットが一家族としての絆を持てるような取り組みによる課題の解決を期待したい。
5. 人材の育成と支援					
10	19	○職員を育てる取り組み 運営者は、管理者や職員を段階に応じて育成するための計画をたて、法人内外の研修を受ける機会の確保や、働きながらトレーニングしていくことを進めている	内部の研修の計画は無いが、外部の研修については、できるだけ各々の希望に応じてシフトを組むようにして、休日を利用して受けられるように配慮している。		
11	20	○同業者との交流を通じた向上 運営者は、管理者や職員が地域の同業者と交流する機会を持ち、ネットワークづくりや勉強会、相互訪問等の活動を通じて、サービスの質を向上させていく取り組みをしている	他の同業者との交流は殆ど無いが、グループホーム連絡会には加入しており、施設長の人脈を通じての交流はある。		

外部	自己	項 目	取り組みの事実 (実施している内容・実施していない内容)	(○印)	取り組みを期待したい内容 (すでに取組んでいることも含む)
Ⅱ.安心と信頼に向けた関係づくりと支援					
1. 相談から利用に至るまでの関係づくりとその対応					
12	26	○馴染みながらのサービス利用 本人が安心し、納得した上でサービスを利用するために、サービスをいきなり開始するのではなく、職員や他の利用者、場の雰囲気に徐々に馴染めるよう家族等と相談しながら工夫している	お試し利用は行っていないが入居時には家族にしばらくついていてもらうか、あえて距離をとってもらうなど状況に応じて家族の協力を得て馴染みながら生活できるよう取り組まれている。		
2. 新たな関係づくりとこれまでの関係継続への支援					
13	27	○本人と共に過ごし支えあう関係 職員は、本人を介護される一方の立場におかず、一緒に過ごしながらか喜ぶ哀楽を共にし、本人から学んだり、支えあう関係を築いている	情緒に寄り添うケアについて、本人から学び、互いに支えあう関係の重要性について職員の理解が不十分であり、実践に結びついていない。	○	運営者、職員一人ひとりが高齢者の介護とは何か、認知症とはなにか、プロとしてのケアとは何かを再確認し、実践と研修を繰り返し理念の実現に向けての努力を望みたい。
Ⅲ. その人らしい暮らしを続けるためのケアマネジメント					
1. 一人ひとりの把握					
14	33	○思いや意向の把握 一人ひとりの思いや暮らし方の希望、意向の把握に努めている。困難な場合は、本人本位に検討している	身体拘束をするのには理由があり、家族も同意の上の事だが、対応困難な入居者の行動に対し、つなぎ服の着用などの対症療法が中心で、その人の根本に眠る思い・意向を探り理解する姿勢が希薄であり、本人本位のケアとは言い難い。	○	運営者、職員一人ひとりが認知症ケアについての知識を深め、全体像を描きケアの基本を学び直し、ホーム独自の理念を作り直して実践するところから出直す事を期待したい。
2. 本人がより良く暮らし続けるための介護計画の作成と見直し					
15	36	○チームでつくる利用者本位の介護計画 本人がより良く暮らすための課題とケアのあり方について、本人、家族、必要な関係者と話し合い、それぞれの意見やアイデアを反映した介護計画を作成している	ミーティングを通じて意見集約・調整の後にプランを決め、その過程において職員間でのプランの共有が図られている。		
16	37	○現状に即した介護計画の見直し 介護計画の期間に応じて見直しを行うとともに、見直し以前に対応できない変化が生じた場合は、本人、家族、必要な関係者と話し合い、現状に即した新たな計画を作成している	入居者に対しての月に1度のモニタリングと3ヶ月に1度のケアプラン見直しを行い、本人の状態に合わせて随時家族と連絡を取り合いつつ柔軟なケアプラン作成・実施を行っている。		

外部	自己	項 目	取り組みの事実 (実施している内容・実施していない内容)	(○印)	取り組みを期待したい内容 (すでに取組んでいることも含む)
3. 多機能性を活かした柔軟な支援(事業所及び法人関連事業の多機能性の活用)					
17	39	○事業所の多機能性を活かした支援 本人や家族の状況、その時々要望に応じて、事業所の多機能性を活かした柔軟な支援をしている	事業所の多機能性という言葉に対し理解が不十分で特別な取り組みは見られないが、併設デイへの訪問が自由にできるように配慮されている。		
4. 本人がより良く暮らし続けるための地域支援との協働					
18	43	○かかりつけ医の受診支援 本人及び家族等の希望を大切に、納得が得られたかかりつけ医と事業所の関係を築きながら、適切な医療を受けられるように支援している	主治医については本人・家族の希望が最優先され、往診や通院等の医療行為はスムーズに受けられるよう支援している。		
19	47	○重度化や終末期に向けた方針の共有 重度化した場合や終末期のあり方について、できるだけ早い段階から本人や家族等ならびにかかりつけ医等と繰り返し話し合い、全員で方針を共有している	終末期については、ホーム側で対応するのではなく、医療施設による看取りを前提とした方針を決めている。		
IV. その人らしい暮らしを続けるための日々の支援					
1. その人らしい暮らしの支援					
(1) 一人ひとりの尊重					
20	50	○プライバシーの確保の徹底 一人ひとりの誇りやプライバシーを損ねるような言葉かけや対応、記録等の個人情報の取り扱いをしていない	日常におけるケアの中でプライバシーを損ねる声かけは特に見られない。		
21	52	○日々のその人らしい暮らし 職員側の決まりや都合を優先するのではなく、一人ひとりのペースを大切に、その日をどのように過ごしたいか、希望にそって支援している	職員一人ひとりが入居者本人の毎日の希望を引き出し、状況に合わせて過ごし方を描き、実行するといった取り組みは特にみられない。	○	実際にケアに携わる職員が状況を自身で考え、計画してケアを進めるといった現場重視の姿勢への転換を期待したい。その為にも運営者の意識改革を要すると思われる。

外部	自己	項 目	取り組みの事実 (実施している内容・実施していない内容)	(○印)	取り組みを期待したい内容 (すでに取り組んでいることも含む)
(2) その人らしい暮らしを続けるための基本的な生活の支援					
22	54	○食事を楽しむことのできる支援 食事が楽しみなものになるよう、一人ひとりの好みや力を活かしながら、利用者と職員が一緒に準備や食事、片付けをしている	ケアの一環としての食事の楽しみについての取り組みは重視されておらず、職員が食事を一緒に摂ったり入居者と同じメニューを食べる事をしていない。	○	グループホーム本来の姿を今一度見直し、家庭的な雰囲気での生活を実現させるために、ホーム側は主体的に明確な方針を持つことが望まれる。
23	57	○入浴を楽しむことができる支援 曜日や時間帯を職員の都合で決めてしまわずに、一人ひとりの希望やタイミングに合わせて、入浴を楽しめるように支援している	基本的には週3日としているが、希望や状況に合わせて対応している。		
(3) その人らしい暮らしを続けるための社会的な生活の支援					
24	59	○役割、楽しみごと、気晴らしの支援 張り合いや喜びのある日々を過ごせるように、一人ひとりの生活歴や力を活かした役割、楽しみごと、気晴らしの支援をしている	役割を持てるような支援についての取り組みは特にされていないが、調理や洗濯物たたみなど、家事の手伝いのできている入居者もいる。		
25	61	○日常的な外出支援 事業所の中だけで過ごさずに、一人ひとりのその日の希望にそって、戸外に出かけられるよう支援している	買い物や外食の支援は行わない方針であるが、外出の重要性は認識されており、ホーム前の広場内での散歩を行なっている。		
(4) 安心と安全を支える支援					
26	66	○鍵をかけないケアの実践 運営者及び全ての職員が、居室や日中玄関に鍵をかけることの弊害を理解しており、鍵をかけないケアに取り組んでいる	夜間以外は施錠はせず、入居者が外に出た場合は見守るなどの対応を行っている。		
27	71	○災害対策 火災や地震、水害等の災害時に、昼夜を問わず利用者が避難できる方法を身につけ、日ごろより地域の人々の協力を得られるよう働きかけている	食料の備蓄はなく、記録や消防計画などの関連資料を作成していないが、火災想定避難訓練は実施されている。		

外部	自己	項 目	取り組みの事実 (実施している内容・実施していない内容)	(○印)	取り組みを期待したい内容 (すでに取り組んでいることも含む)
(5) その人らしい暮らしを続けるための健康面の支援					
28	77	○栄養摂取や水分確保の支援 食べる量や栄養バランス、水分量が一日を通じて確保できるよう、一人ひとりの状態や力、習慣に応じた支援をしている	食事摂取量や水分摂取量のチェックは常に成されておりケアプラン作成・見直しや体調管理等に活用されている。		
2. その人らしい暮らしを支える生活環境づくり					
(1) 居心地のよい環境づくり					
29	81	○居心地のよい共用空間づくり 共用の空間(玄関、廊下、居間、台所、食堂、浴室、トイレ等)は、利用者にとって不快な音や光がないように配慮し、生活感や季節感を採り入れて、居心地よく過ごせるような工夫をしている	入居者の対応困難な行動を避けるため、共有空間には必要最低限の物しか置かないようにしており、生活感や季節感に乏しい。リビング内には構造上必要だが生活上障害物となる大きな柱が存在している。テレビの位置も天井に近い所に据え付けられており入居者が観やすい配置とはいえない。	○	自宅の延長とした生活を考慮し、入居者の視点で居心地の良い生活空間を作り上げることが望まれる。柱を利用して居心地の良いインテリアを創るにはどうすれば良いかの検討を望みたい。テレビの設置場所についてもデッドスペースの活用や薄型TVを壁掛けにするなどの工夫での解決が望まれる。
30	83	○居心地よく過ごせる居室の配慮 居室あるいは泊まりの部屋は、本人や家族と相談しながら、使い慣れたものや好みのものを活かして、本人が居心地よく過ごせるような工夫をしている	馴染みの物を持ち込んだり、その人にとって落ち着けるその人らしい部屋の必要性の認識が薄く、画一的な部屋が多い。一部の入居者に対しては対応困難な行動がみられるという理由で居室に全く物を置かずクローゼットも開かないようにするなどの対処をしている。	○	認知症についての知識を深め、入居者本人をよく知り、居心地の良い居室の在り方が本人に与える影響を考え、どのようなケアが望ましいのかを全職員で考察することを期待する。